

第七回留学報告書

2015年度 FOS 奨学生 福井真夫

1 思い込み

社会科学者たるもの、先入観を捨てて純粋な目で理論やデータを見つめなければならないと心がけてきた。誰かにそうはつきりと教えられたわけでもないが、それがあべき研究者の姿だと自然に心に植え付けられていた。「先入観を捨てる」というのはどことなく響きが良いからだろう。

アメリカに来てから出会うトップの研究者と話すうちに、大発見をするような研究者はむしろ逆なのかもしれないと思うようになった。平たく言えば皆、「思い込み」が激しい。「世界はこうなっていなければおかしい」という強い先入観に囚われてそれを追い求めて研究しているような印象を受ける。自分の経験と照らし合わせるとなぜこういう研究者が大発見をするのかどことなく納得がいく。ある仮説を持って、データを見てみると、往々にしてデータは仮説通りの結果を出さない。「先入観を捨て」ようとする僕は、「そうか、僕の仮説は正しくなかったのか」と落胆して他の仮説を立ててという煮え切らないプロセスを繰り返すことがよくある。

「そんなわけではない！」僕が教授の先入観に合わない実証結果を見せると、教授はそう叫んであれこれ「データが間違っている」理由を考え続けた。自分の仮説が正しいと信じてやまず、一向に諦める気配を見せない。こういう時、僕だったら「ああ、僕の仮説は間違っていたんだ」と落胆してパソコンを閉じていただろう。ノーベル賞を受賞したマクロ経済学の理論家が、「俺の素晴らしい理論を棄却するから実証研究はクソだ」と言い放って学部から実証研究者を追放した話を思い出した。それは極端にしても、僕に欠けているのは「世界は自分の思うようになっていなければならない」という強い思い込みなのかもしれないとふと我を省みた。

現実社会は果てしなく複雑である。先入観を抜きにして現実を見ようとする、何から手をつけて良いか分からず雲に包まれて動けなくなるか、既存の研究が切り開いた道筋をなぞるだけになってしまう。まだ誰も切り開いていない雲の中を掻き行っ先に進むために必要なのは、唯我独尊ともいえるような思い込みなのかもしれない。